

松本平のエビス信仰（下）

——松本市商業地域のエビス社を中心に——

田 中 宣 一

はじめに

前稿においては、長野県松本市東北部の浅間温泉の高台に鎮座する西宮恵比寿神社が、明治時代に兵庫県西宮市の西宮神社を勧請したものであることを述べ、同神社の神札が松本平一帯の農村部に広く頒布され、それら農村地域のエビス信仰に大きな影響を与えている実態を分析した。そのさい、松本市域の中心部に鎮座する深志神社境内の恵比寿神社、本町一丁目の恵比寿神社、四柱神社境内の恵比寿神社についても、周辺農村部の人びとをも吸収しながら市街地

の商業に携わる人びとに支えられていることを、予備的に触れておいた。

小稿は、それら三社のエビス⁽²⁾、および三社にかかわるエビス信仰について述べることを目的とする。そして最後に、前稿をも踏まえて、松本平のエビス信仰の全体像についてまとめる。

一、深志神社のエビス

深志神社（ふかしじんじや）は、松本市街中心部を流れる女鳥羽川より南の、旧城下町南部地域の古来の神社である。祭神は建御名方富命と菅原道真公で、七月二十五日の例大祭は、天神祭りと呼ばれて市民に親しまれている⁽³⁾。天神祭りのほか、二月の節分祭や七月の八坂祭など恒例祭事が多い。氏子圏は広くて、いわゆる南深志の四十八カ町におよんでいる。

古く神社周辺が宮村村と呼ばれていた頃には、諏訪の神（建御名方富命）として宮村大明神が祀られていた。江戸時代初期、そこに領主小笠原家が他の地に勧請してあった北野天満宮をここに合祀し、天保十二年（一八四一）にいたって社名を深志神社とした。いつのころからか、これに社殿を並べ相殿のような形で事代主神・大国主神を祀って恵比寿神社とし、これが深志神社のエビス神である（本殿の右後方すなわち向かって左後方にこの恵比寿神社がある）。深志神社境内には多くの小社が祀られているが、そのなかには市神社（後述の飴市の主役となる

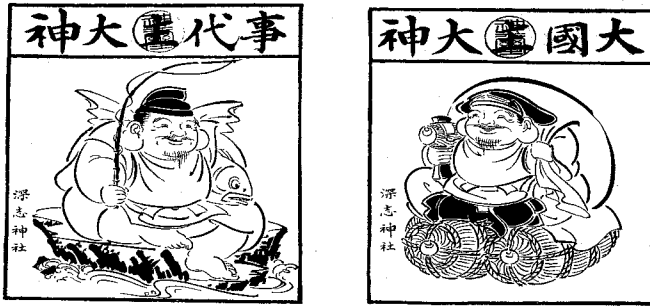


図1 深志神社のエビス・大黒の神札

神）もあって、いかにも江戸時代からの商業地域を氏子圏に持つ神社らしい。

（1）エビスの祭り

エビスの祭りは十一月十九日・二十日で、社殿において厳粛に執り行なわれている。参拝者も少しはあるようだが、露店が出て賑わうようなことはまったくなく、神職中心の祭りである。神社ではエビス・大黒として、神社伝来の版木を用いて図1のような「事代主大神」「大黒主大神」という神札を頒布している。勧請の時期や由来は明らかでないが、当時の図会類からみて、すでに江戸時代後期には祀られていたことがわかる。とくに資料があるわけでもなく、また現在、西宮の本社とつながりを持っているわけではないが、筆者には、兵庫県西宮神社から勧請したものではないかと思われる。

(2) えびす神お里帰り祭

深志神社では、十九日夕刻から二十日までのエビスの祭りに先だつて、十八日夜に「えびす神お里帰り祭」と呼ぶ特異な祭りが催されている。

「えびす神お里帰り祭」には、氏子有志宅のエビスの神像がお里帰りという意味で神社に持ち寄られるのだが、このような「えびす神お里帰り祭」は、管見のかぎり、全国のエビスの祭りのなかでここだけのものである。神社側の解釈では、氏子各家のエビス神は基本的には神社のエビス神の分霊なので（事實はそうとは限らない）、そのエビスが、年一回、各家のエビス祭祀である十一月十九日夜から二十日のエビス講に先だつて十一月十八日に神社に里帰りをすむということであり、神社で祀られたあと再び家に戻り、家単位のエビス講を迎えるというわけである。筆者には、神社側あるいは有力氏子の発案によって始まった、この四、五十年來の新しい祭りかと思われるが、神社側には確たる資料が保存されていないようであるし、また氏子間の伝承もまちまちなので、発祥の確かな年代や意図は今のところ明らかにできないでいる。しかし、この祭りの背景には、エビス去來伝承や興味深い俗信も潜んでいるので、次に、興味深いこの祭りの全体像を明らかにしておきたい。

十一月十八日の「えびす神お里帰り祭」当日には、昼ごろから、氏子のうち希望者が、自宅や店舗で祀っているエビス像（エビス・大黒一対の神像がほとんどである）⁴を風呂敷などに包

んで大切そうに神社に持ち寄り、神社ではそれらを本殿正面に設けられた壇上に、まるで雛祭りのときの雛を飾るようにつぎつぎに並べる。受付などこの祭りの世話は神社年番町会の人々が担当するので、神像を受け取るのは年番であるが、それらを壇上に並べ祀るのは神職が行なう。筆者が祭りに参列させてもらった平成十三年（この年には本殿改築中であつたため社務所二階の大広間にて行なわれた）には九十八体（エビス・大黒一対を一体と数えて）、平成十七年には九十七体の神像が壇上に並べられていたので、毎年だいたい一〇〇体前後のエビス像が持ち寄られていると考えてよいのだろう。氏子である四十八町会約五〇〇〇世帯のうちの商家から持ち寄られるものが多く、自宅神棚のエビス像のほか、店舗や会社事務所のエビス像も含まれている。

そして、夕刻六時三十分ごろより祭りが始まる。拝殿にはエビス像を持ち寄つた人びとが参列している。祭りは、神職による修祓、全員一拝、神職による祓いの詞、里帰り祝詞奏上などが型どおり進められ、祝詞のなかでは神像を持ち寄つた家の名がすべて読み上げられる。そのあと氏子会長などの玉串奉奠があつて祭りは終了し、直会となる。直会の前に、参列者はめいめい壇上から自家のエビス像を下ろして風呂敷に包んだり紙袋に納めたりし、直会のあと自宅に持ち帰つてエビスの神棚に納め、翌日からの家々のエビス講を迎えるのである。

十一月十九日夜から翌二十日の家々のエビス講は、祭りに集まつた何人かの方の話によると、

各家のエビス神棚のエビスに神酒や白いご飯、秋刀魚などの尾頭つきの魚を供え、商売繁昌・家内安全などを願って、家族揃って拝むというような祀りかたが多い。魚としては秋刀魚にしる鮭にしる尻尾だけ供えてもよいと言われているようだが（ということは尻尾だけでもよいから魚がなければならぬということであろう）、実際には尾頭つきを供えている。神社のこの里帰り祭に参加はしていても、エビス神去来の伝承を知っている人はほとんどなく、またエビスの不具神伝承も参加者からは聞くことができなかった。周辺農村部では、稀薄ながらも去来や不具の伝承を聞くことが可能なのに、商家のエビス神はもっぱら商売繁昌の神として祀られているように思われる。

ところで、他にほとんど例をみないこの「えびす神お里帰り祭」は、そもそも、いついかなる契機から始まったのであろうか。神社に資料が保存されていないらしく、また参加者からの聞き取りによっても明瞭な答えが得られず、筆者には現在のところ確たることは不明としか言いようがない。しかし筆者が思うに、古い祭りではなく、昭和三十年代後半から四十年代初頭にかけて行なわれ始めたものと推測している。それは、持ち寄られるエビス・大黒像から判断しての推測である。

持ち寄られるエビス・大黒像は小ささまざまである上、木彫の像、金銅製のもの、陶製のものなどいろいろあり、祭壇上は、さながら各家のエビス・大黒像展示会の観を呈している。黒

松本平のエビス信仰（下）



写真1 向かって左三体が深志神社で授与しているエビス・大黒像

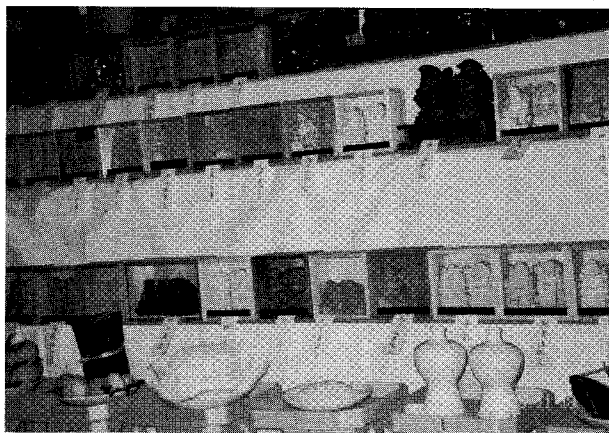


写真2 本殿前に並べられたエビス・大黒像

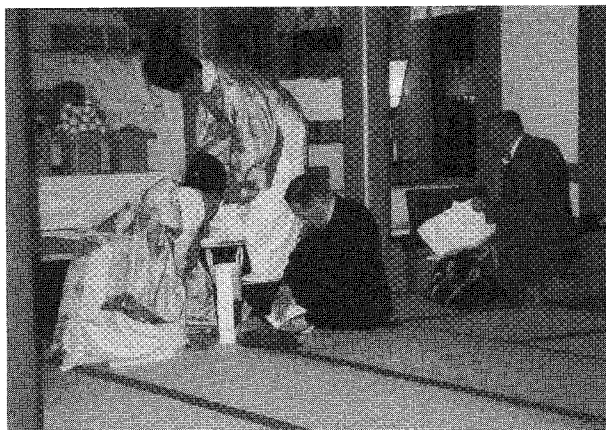


写真3 祭りのあと、壇上から下ろして持帰る

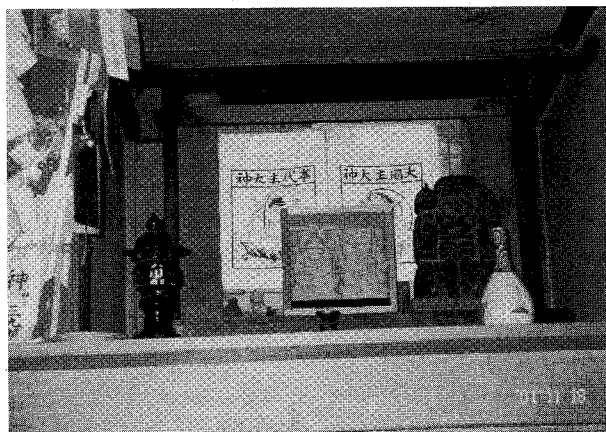


写真4 神札やエビス・大黒像はこのように家の神棚に祀られる

光りしている像が少なくないのは、長年、台所のエビス棚などで、煤にむせながら家の繁栄を護りつづけてきたからであろう。そのうち筆者が確認できたもので制作年代の明らかなものも古い像は、明治十二年のもので、原田蒼溪彫刻と記されているエビス・大黒像であった。この像の制作経緯は興味深いので、後述したい。

それらさまざまな神像のうち圧倒的に多いのは、写真1の向かって左の三体のような、一升枧に納められた高さ十五センチほどのエビス・大黒一対の木彫の神像である。枧の側面表側には「別表社深志神社」、底部表側には「奉祀 大國主大神・事代主大神 □年□月□日□□家」(□にはそれぞれ年月日や家名が入っている)と、皆同じように墨書されている。平成十三年の場合、全九十八体のうち七十二体が、このような一升枧に納められた画一的な木彫神像であった。写真2によって、この画一的な神像が祭壇上に多数を占めている様子がおわかりいただけるであろう。

画一的なこの神像は、側面に「別表社深志神社」と記されていることからわかるとおり、神社側が希望者に頒布(ないしは授与)した像である。そのうち、やや煤けて古色を帯びているもの十体ほどにつき、枧の底部表側に記されている頒布年月日を見せていただいたところ、もっとも古いのは昭和四十二年十一月吉日と記された像で、これが二体、つづいて古いのは翌四十三年一月吉日のもので、四体あった。すべてに当たってみればさらに年代の遡りうる像が

あつたかも知れず、また、筆者が参列した年には何らかの家の事情で持ち寄ることのできなかったものの中に、さらに古い像があるのかも知れないので断言はできないが、右の事実からみて、筆者は、このような画一的なエビス・大黒像を頒布するようになったのは、昭和四十年前後ではなかつたかと考えている。したがって、これら頒布したエビス・大黒像を里帰りさせるという「えびす神お里帰り祭」も、昭和四十年前後に企画されたのではないかと考えられる。

「えびす神お里帰り祭」の現状は、以上のとおりである。それほど古くからの祭りだとは思われないにもかかわらず、開始の時期や意図については、現在のところ以上に述べたような推測しかできないでいる。ただ、里帰りを目的とするこの祭りの背景には、現在ではほとんど忘れ去られているとはいえ、エビス神が春秋に去来するという古い民俗的心意のあつたことは想定してもよいだろう。と同時に、今後の課題として、次に述べるようなたいへん興味深い事実との関連についても掘り下げるべきであることを、指摘しておきたい。

(3) 橋板三枚目で制作のエビス・大黒像

興味深い事実とは、先に触れておいた明治十二年に原田蒼溪が制作したエビス・大黒像の台の裏側に、「松本一ツ橋掛替三枚目板ニテ是ヲ刻ス 二福神 彫刻師伊勢町原田蒼溪」とある点である。伊勢町とは松本市中心部の町名のひとつだが、その地元の彫刻師が、松本一ツ橋の

架替えのさいに取りはずした三枚目の板で刻したのが、このエビス・大黒の二福神像だというのである。

神像を、こともあろうに誰でもが踏みつけたであろう古い橋板を用いて制作するとは何ごとか、というのは現代人の感覚であつて、福神像制作に三枚目の橋板が良いという俗信はすでに江戸時代前期からあつた。井原西鶴の『日本永代蔵』巻二「才覚を笠に着る大黒」には次のように述べられている。

一に俵、二階造り、三階蔵を見わたせば、都に大黒屋といへる分限者ありける。富貴に世をわたる事を祈り、五条の橋切石に掛けかはる時、西づめより三枚目の板をもとめ、是を大黒に刻ませ、信心に徳あり、次第に栄え、家名を大黒屋新兵衛と、知らぬ人はなかりき。

（『新編日本古典文学全集』68 小学館）

京都の鴨川・五条大橋架替えのさい、ある商家が西から三枚目の踏板で大黒像を制作させて祀つていたところ、次第に繁昌して分限者になつたという話である。『日本永代蔵』はフィクションではあるが、『百姓伝記』二にも、伝教大師が比叡山の鎮守として橋の三枚目の板で大黒神を制作したと述べられており、その理由として、「いかなる橋へも人行かかると、三枚目の板に足のあたらぬといふ事なし」と説明されている。⁵ 誰でも踏みつけるからこそ、橋の三枚目の板で彫つたというわけであり、江戸時代にこのような俗信が一般に信じられていたこと

がわかる。

明治十二年制作の「松本一ツ橋掛替三枚目板ニテ」刻したとという二福神（エビス・大黒）像は、同様の俗信が松本にも広まっていたことを明らかにしてくれている。この俗信は昭和に入っても松本周辺において生きつづけたらしく、南安雲郡の穂高神社の古い橋板でもエビス・大黒像が制作されていた。穂高神社では、本殿三殿のうち一殿ずつを二十年に一回建替えているが、昭和三十年ごろに橋を石橋にするまでは、本殿の建替えにあわせて木の橋も架替えていた。その昭和三十年ごろの最後の架替えのとき、穂高神社では、神社といろいろ関係のあった彫刻家・田中徳齋氏に依頼して古い橋板でエビス・大黒像を彫ってもらい、一升枡に納めて信者に頒布したといわれており、深志神社の氏子の中にもその時のエビス・大黒像を祀っている家がある。

さらに、田中徳齋氏は松本在住で深志神社の氏子のひとりでもあったようで、「えびす神お里帰り祭」に持ち寄られている神社頒布の昭和四十年代のエビス・大黒像は、田中徳齋氏彫刻のものだと伝えられているのである。これらが穂高神社の場合のように、どこかの橋板で制作された像であったのかどうかは確認できていないが、以上のことから、深志神社が頒布して「えびす神お里帰り祭」に持ち寄られる一升枡に納めた画一的なエビス・大黒像が、かつて穂高神社でエビス・大黒像を信者に頒布した趣旨にどこかで結びついている可能性はある（ただし

穂高神社の場合は一回だけのことである上、お里帰りなどは行なわれていない。詳細は今後の調査を待たねばならないが、まことに興味深い事実ではないだろうか。

これから述べることは「えびす神お里帰り祭」にとつては余談と言えようが、なぜエビスや大黒の神像を橋板で作るのか、その理由を問う必要もある。そこには、橋に纏綿する古い信仰が隠されているのであろうか。あるいはそれもあるかも知れないが、理由を考えるにあたっては、神像がエビスや大黒という福神である点と、『百姓伝記』が説明するように誰でも踏みつけるであろう三枚目の板である点に注目する必要があるだろう。

農家のエビス・大黒は、天照大神や氏神などを祀る一般の神棚とは異なり、勝手・台所に祀られることが多い。一般の神棚に並祀されている場合でも、他の神とは一段低い位置に祀られている例も珍しくない。差別されているかにも見える。エビス・大黒、とくにエビスは、目や耳や足が不自由だとか、極端に醜いという伝承が全国に広く分布していることも考えあわせると、元来、他とは異質な神だとされてきたのは間違いない。また、エビスの春秋去来伝承を説く地域では、エビスが春に働きに出ていくさいには、わざと粗末な物を少量だけ供えて反撥心を喚起させ、一生懸命働かせ稼がせようなどとしている例も多いのである。農家においてしばしばみられるこのような、異質な神であり苛酷な境遇にとどめて大いに働かせようというエビス・大黒への認識から、その神像を誰でも踏みつけるであろう三枚目の橋板で彫るといふ発想が生

まれたのだと、筆者には思われるのである。

二、本町一丁目のエビス

深志神社のエビスとは別に、深志神社氏子圏の商業地域には、地域で祀るいくつかのエビスがある。その代表とも思われる本町一丁目の恵比寿神社（他と区別するために、以下、一丁目エビスと呼ぶ）について、述べていきたい。

一丁目エビスは、実は本町一丁目には鎮座してなくて、本町一丁目とは離れた深志神社境内脇の独立した社殿内に祀られている。なぜここに一丁目エビスが祀られているのか、筆者には未詳であるが、かつて一丁目で購入し始めて祀り始めたのだと伝えられている。これが事実だとすると、明治中期の神社景観図には現在の一丁目エビスの社殿とほぼ同じ位置に社司宅とエビス・大黒祠があるので、何らかのいきさつがあつて、明治後期か大正初期に、有力商人の多く存在していた一丁目社司宅とエビス祠を神社から譲り受け、本町一丁目の恵比寿神社として祀りはじめたものであろうか。

社殿内には、祭神の事代主命・大国主神とは別に、拜殿には風折烏帽子に鯛を抱いた一メートル五十七センチほどの立派なエビス像（写真5参照）が祀られており（組み立て式になってお

松本平のエビス信仰（下）



図2 本町一丁目のエビス・大黒の神札



写真5 一丁目のエビス講で拝殿に据えられるエビス像

り祭りのときのみ祀る)、これについては次のような話が伝えられている。すなわち、江戸時代の享保年間、深志神社の祭礼の山車巡行のとき、本町一丁目の舞台に据えられていたこのエビス像が、二丁目の舞台の大黒像とすれちがったさいに笑いあつたという話である。本来は山車に乗せるものだったのだろうが、大正時代中期に社殿を新築して以降、これをエビス講のときには拝殿にも据え祀るようになったのだという。

祭りには深志神社の神職が来て祭典を執行するが、一丁目エビスの管理運営は本町一丁目で行っている。神札も、本町一丁目の年番が保管している独自の版木で印刷し頒布している(図2参照)。このようにこの恵比寿神社は、あくまでも本町一丁目の神社である。祭日は十一月十九日・二十日であるが、松本市商店街の伝統行事である一月十日・十一日の飴市には、一丁目内に仮宮を設けて一丁目エビスの祭神を勧請し祀る。以下に述べていくのは、十一月の祭りとい月の飴市のさいのエビスの祭りである。

なお、本町(ほんまち)とは、町名変更以前に長らく用いられていた地域名で、一丁目から五丁目まであり、中町・伊勢町などと並んで市の商業の中心であった地域の名称である。そのうち一丁目は、現町名ではほぼ中央二丁目を中心とした領域にあたる。旧来の本町一丁目とか二丁目などという単位は、現在においても、飴市など祭りの単位としては生きている。また、一丁目エビスの縁によるのであろうか、かつては一丁目の商店(その後二丁目の商店なども加

わる)が「本町えびす会」を組織して、松本の商業活動の中核となっていた。しかし、この会が中心となつて昭和三十年代後半に本町近代化推進連盟を発足させた結果、「本町えびす会」はそのなかに発展的に解消されることになつてしまつた。

(1) 十一月のエビス講の祭り

まず、現在の一丁目エビスの祭り(エビス講ともいう)について述べる。

十一月十九日は宵祭りで、午後遅くに年番の人々が神社に集まつて、日ごろは閉めてある社殿(エビス殿と呼んでいる)や社務所を開放し、提灯を吊したり神饌を供えたりして宵祭りの準備をする。この年番とは一丁目独自の組織で、一丁目を三ブロックに分け、ブロックごとに一年交替で担当する。同じブロックの商人でも、ビルにテナントとして入っている人に年番をあてるわけにはいかないの、旧来の商家が担当し、そのうちから年番長が一人選ばれている。年番の仕事はエビス講のほかに、一丁目としてかわる年間の幾つかの祭りの世話である。そして、十一月のエビス講の世話をしてから、次のブロックの家々に年番を交替する決まりになつてゐる。

宵祭りの祭典は、神職の祝詞奏上あと、町会長が玉串奉奠をし、つづいて年番長が玉串を捧げ、その年番長の拝礼にあわせて参列者一同が拝礼して終わる。筆者が平成十七年に参列さ

せてもらったときには、参列者は二十余名で、年番の家々を中心に一丁目の有志数名が加わるというくらいのものであった。そして祭典のあと、社務所にて参列者一同賑やかに直会をして解散した。

宵祭りといつても右に述べたことがほとんどすべてで、年番をつとめる家々の人以外には参拝者もほとんど見当たらず、したがって露店などどこにも出ていない。そして翌二十日が本祭りであるはずだが、この日にはとくに祭典はなく、宵祭りのみが一丁目エビスの祭りだというのが現状である。

神札は祭りの終わったあと、終了報告をかねて年番のうちの係の人が一丁目の家々に頒布して歩く。宵祭り当日も社務所にて頒布しているが、筆者の見るかぎり受けていく人は年番の家以外ほとんどいなかった。参拝者が年番以外にほとんどいないのだから、これは当然のことである。

現在ではこのように小じんまりした祭りになってしまっているが、戦前には一丁目エビスの祭りも賑やかだったという。

宵祭りの祭典の基本的なことは現在と同じだったが、この両日（十九・二十日）には本町・中町など南深志の商店街ではエビス講大売出しを盛大に行なったため、松本の町は周辺農村部からの買い物客で溢れ、また農家の人でも作物を持って来て売る人がいたりし、市の中心部は

股賑をきわめたのであった。これに伴って一丁目エビスへの参拝者も多く、一丁目の人々は年番を中心に社務所に詰めて神札やら福柁などを授与していた（売っていた）。露店も多く並んだが、当時は深志神社前の天神通りの一角にはいわゆる花街があったので、芸者を連れた酔客なども商売繁昌祈願に訪れていたようである。このようにかつてのエビス講はたいへん賑わい、宵祭りなどは夜通しやらないといけないといわれていたくらい、夜遅くまで続いていたようである。

このような一丁目エビスの祭り（エビス講）だったが、戦中戦後には商店街の大売り出しもかつての盛況を減じたためか、次第に参拝者が少なくなり、年番だけが集まる小じんまりした祭りになってしまったのである。それに代わって、後述するように昭和二十七年に四柱神社でエビスを祀り、四柱神社周辺の商店街が大売り出しに力を入れ始めたこともあり、現在の松本市域のエビス講は、四柱神社境内の恵比寿神社を中心とした祭りになっている。

なお各商家では、家のエビス・大黒像にお頭つきの魚や白米・神酒を供えて商売繁昌を祈るが、この日は商家自身が忙しいので、多くの人を招いて祝ったりはできない。このような家のエビス祭りは、家々によって事情は異なると思うが、現在でも続けている家が多いようである。また大きな商家に従業員が多かった戦前には、エビス講の日からは足袋を履いてもよいとされていたようである。この日まで寒くても素足だったという。これは農村部でも言われていた

ことのように、そのためエビス講には足袋がよく売れたようである。¹⁰⁾

(2) 飴市のエビスの祭り

次に、一月十日・十一日（近年は一月の第二土・日曜日となっているが、小稿では以前にそうであったように十日・十一日として述べていく）の飴市のさいの一丁目エビスの祭りについて述べる。

飴市とは、江戸時代初期あるいはそれ以前からつづくという正月の初市で、古くは塩を中心に各種商品が扱われていたが、その後、飴の商いが目を引くようになり、自然に飴市と通称されるようになった。市がたつのは本町・中町・伊勢町など南深志の中心的な商業地域においてである。当日はここへ、深志神社境内の市神が本町二丁目の人々によって勧請され、それに伴って本町一丁目から五丁目までの神輿や山車や獅子頭が各町内に迎えられ祀られるので、初市（飴市）は市神祭りとも呼ばれてきた。戦後しばらくの間やや衰えたというが再び盛りかえし、また昭和四、五十年代になって少しさびれるというように若干の盛衰はあったようではあるが、江戸時代から現代まで一貫してつづく賑やかな祭りである。平成四年からは「松本あめ市フェスティバル」と名づけられ、市神祭りとしての神事色は各町内の行事として残しながらもいろいろ催しを加え、松本市の冬の大イベントになっている。小稿ではこの飴市の全体像には触

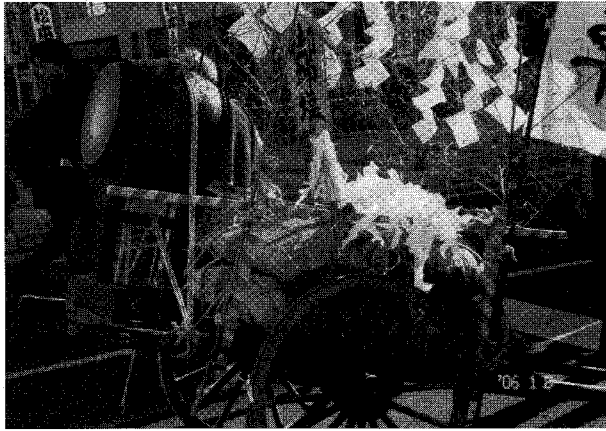


写真6 飴市のとき、町内を曳きまわす塩。これは本町二丁目のもの

れないでおく⁽¹⁾。このときに本町一丁目に勧請される一丁目エビスの祭りについてのみ、述べることにする。

社殿からエビス神を迎えるために、かつては鳶職が一丁目内に大きな仮宮を建てていたが、新しい街づくりとして商店街にアーケードが設けられたために仮宮の屋根を高くすることができなくなり、現在では小さな仮宮を設けて迎えている。この仮宮を拝殿、仮宮にエビスを迎えて祀ることを出開帳と呼ぶ人もいる。

十日が宵祭り、十一日が本祭りである。十日午前中に深志神社脇の一丁目エビスの社殿から、神体を神輿に納めて肅々と本町一丁目の仮宮に迎えてきて祀る。十一日の午後には仮宮を片づけて再び神体を神輿に移し、町内を練り歩いたあと、夜に一丁目エビスの社殿まで担いで行つ

て神体を元に納める。現在では往復とも神輿を車に乗せるが、後述のように、帰りのときにはかつて激しく担いだといわれている。

十日・十一日の両日は寒い時期であるにもかかわらず、正月祝いの余韻もあつてか、戦前も現在においても近郊農村部から多くの人出があり、各商店街では大売出しをする。飴を売る店なども並ぶが、戦前や戦後しばらくまでは、呉服屋などでは端切れ布を福ギレと呼んで安く売ったので、これが人気だった。

また、かつては塩の専売所が神前に粗塩を一斗ほど三角形に盛り上げて供えたので、子供組がそれを分けてもらい、少しずつオヒネリにして仮宮の横で売っていた。「ジュゴニチノオカユノオシオ（小正月の十五日粥用の塩の意）」という掛け声で売ったのであるが、縁起のよい塩だということでもよく売れたという。子供組は同時に縁起物の小さな土製ダルマも売っており、これらの収入は、祭りのあとでオオンド（大音頭か）という子供組の親方（小学六年生）の裁量で子供たちに配られたり、祭りのあとの子供組のご馳走の費用にあてられていた。このご馳走を機に、オオンド役は次の年代の子供たちに引き継がれたのである。このように、かつての子供達は自分で物事を考え自主的に運営していたなあとは、古老の述懐である。現在でも飴市では塩が売られているが、塩の奉納はもうないので、購入した精製塩を少量ずつビニール袋に入れ、それを飴市の由来を印刷した袋に入れて売っている。もちろん子供組の自主的な販売で

はない。

このように祭りが進み、十一日の午後になると神輿が町内を練り始める。現在は広い歩行者天国を力強く整然と担がれているが、戦前には相当に荒っぽい担ぎ方だったという。神輿は祝いの意味で家の中へ練り込みしていたので、練り込みのときには販売を一時停止する店も出たくらいだという（ただし過去一年間以内に不幸のあった家へは入らなかった）。そのころは道も狭かったので庇や雨樋が壊されることがあったが、一丁目内にかぎっては、神輿に壊されることは神に触れてもらったことになってむしろ縁起がよいのだなどと考えて、弁償の必要なしという不文律のようなものがあつた。ただ、一丁目以外の家を壊した場合には弁償を求められることもあつたという。

そして夜遅く、深志神社脇の一丁目エビスの社殿まで担いで行くのだが、担ぎ手の若者達は興奮して神社手前で行きつ戻りつするので、全体を指揮する年番達はやきもきしたという。時には途中で電車を止めたり、警官を井戸に落とす騒ぎがあつたりして、年番が警察に拘留され、皆で警察へ差し入れに行ったこともあるらしい。

なお、戦時中でも休むことなく毎年一月十日・十一日に一丁目エビスを仮宮に迎えてはいたが、若い者が戦地にいって少なかったので、商家の旦那衆など年輩者が国民服に戦闘帽・ゲートルという姿で神輿を担いだという。このときには、若者ではないので激しく練ることは

なかつたという。

三、四柱神社境内のエビス

四柱神社（よはしらじんじゃ）の境内に祀られている恵比寿神社は、エビス・大黒として、昭和二十七年に、島根県の美保神社から事代主神を、出雲大社から大国主神を勧請して創祀された新しい神社であるが、現在では松本市の商業地域のエビス講の中心的な神社となっている。

四柱神社は、松本市を南北に二分する女鳥羽川より北の旧松本城の堀の埋立地に発展した商店街に鎮座している。市域の中心部に鎮座する規模の大きい神社であるため、いわゆる南深志に鎮座する深志神社に対し、現在では北深志を代表する神社のような感じであるが、広い氏子圏を持ち歴史も古い深志神社とは異なつて、地域住民の自然な信仰に発し住民に密着し発展していった神社というわけではない。明治十一年に東筑摩・西筑摩・南安曇・北安曇・諏訪・上伊那・下伊那のいわゆる南信七郡の神職や有志により、造化三神と天照大神を祭神として創建された、比較的新しい神社である。したがって特定の氏子はいないが、次第に多くの周辺住民の信仰を集めるようになり、信者が増えていったのである。例祭は十月一日〜三日で、神道祭（しんとうまつり）と呼ばれている。恵比寿神社は、この四柱神社の境内に勧請され鎮座して

いる。

（１）エビスの勧請と恵比寿神社

恵比寿神社の主祭神は事代主大神と大国主大神で、保食神も配祀されている。昭和二十七年に出雲地方から事代主神・大国主神二神を勧請してきたとはいえ、最初は独立社殿を持たず、境内に独立社殿が創建されたのは昭和五十年であった。

祭日は、他のエビス関係神社と同じく十一月の十九日・二十日で、エビス講と呼ばれている。このほか神社では毎月十日に恵比寿神社の月次祭を執り行ない、そのうちとくに一月十日は、初エビス祭として賑わっている。祭りにあたっては、神社所有の版木（元宮司上条氏の刻といふ）から図3のような事代主大神・大国主大神・保食神の神札を印刷して、希望者宅に頒布している。頒布先は北深志の家々が多いが、深志神社の氏子圏である南深志にも希望者はいらる。神札は三神（三枚）セットで頒布するのが原則だが、エビス（事代主大神）の神札だけを希望する家もあるという。もちろん祭礼当日にも四柱神社の社務所において頒布し、それ以外の日にも参拝者には随時授与している。

勧請には、市の商業関係者がかかわっていたという。そのうちとくに四柱神社周辺の縄手通りと呼ばれる地域の商店街の人びとが中心になって進めたようで、このエビス・大黒に、戦後復興期の商売繁昌の夢を託そうとしたのだった。勧請の昭和二十七年一月には、早速、遷宮祭

大売り出しが行なわれている¹²⁾。南深志の商店街では、戦後においても江戸時代からつづく正月の飴市が周辺農村部から多くの人を集めて栄えていた。しかし、十一月十九日・二十日のエビス講には深志神社や一丁目エビスはまだ一定の賑わいは保っていたが、かつてほどの盛況さは消えかけていたという。それに比べて長野市などでは秋のエビス講大売り出しが盛大に行なわれていたので、北深志の商工関係者としては、出雲地方からエビスを勧請することによって、南深志の正月の飴市や長野市の秋のエビス講に対抗して、集客をはかるうとしたのであろうか。

松本市周辺部の農村が兵庫県西宮神社のエビスの神札頒布圏であるのに、四柱神社ではなぜ出雲から勧請したのかについては、現在のところ筆者は明らかにできないでいる。とにかく、代表者が出雲に出かけて勧請してきた事代主大神・大国主大神が松本駅に着くと、駅からは馬に乗せて賑やかに行列をして神社へ迎えたのだと、当時をよく知っている人びとの間では語られている。

勧請から十年ほどの間は戦後復興の波に乗って商店街も栄えたので、花火をあげたりしてこのエビス講はたいへん賑わった。しかし昭和三十年代以降、各種の団体がスポーツ大会や商業祭り、農業祭り、芸術祭などを企画し、さらには昭和四十一年に産業祭りが始まり、それらイベントは十月から十一月初旬に集中した。そこで市がこれらを「市民まつり」としてまとめ、商工会議所も呼応して市民まつりに力を入れるようになった結果、十一月十九日・二十日のエ

ビス講の熱気は、一時、ほぼ同じ時期の市民まつりの方に吸収される形になってしまったという。ただしその間も、神社では祭祀が厳肅につづけられ、昭和五十年には、多くの信者の芳志によって社殿が建立されたりもしたのである。

このような事情とは別に、平成の時代に入ると、四柱神社前の女鳥羽川周辺地域が松本市の景観整備の対象となった。そこで、川の護岸工事や地域整備事業をするための国や県・市からの補助金受け入れの組織として、四柱神社周辺の緑町・上土町・商業会（主として地元の古い商店）・商業協同組合（主として地元の戦後開業の商店の会）というような地域の町内会や商店会が中心になって、お城下町（おしろしたまち）づくり推進協議会が結成されたのである。そして景観整備事業推進の過程において、ハード面の整備事業だけではなく人びとが連帯する街づくりについても話合われるようになり、四柱神社境内の恵比寿神社の祭りが再び注目されるようになった。そして、推進協議会の下に「お城下町えびす講実行委員会」が設けられ、神社の祭りを盛りあげて祭りを地域の連帯発展の核に据えようという話になり、従来のエビス講とは趣を異にした新たな装いのもと、平成十年に、「まつもと城下町えびす講」が発足したのであった。



図3 四柱神社境内の恵比寿神社の神札

（2）まつもと城下町えびす講

「まつもと城下町えびす講」は、平成十七年に第八回を迎えた。そのときの状況を述べると、神社側が行なう厳肅な祭典を講の中心に含めつつ、えびす講全体は実行委員会が組織されてこれが主催し、松本商工会議所と松本商店街連盟が協賛し、松本おかみさんが協力するという体制が進められた。来賓として市長や市議会議長などの祝辞もあり、北深志の範域を越えた全市規模のたいへん盛大な祭りに育っている。境内や神社周辺には多くの露店が並び、海鮮市がたち、市中心部街路には祭り用の多くの小幟が立てられて雰囲気盛りあげている。松深会という神輿の会が神輿を担いで地域を巡っている。境内では福引抽選会が行なわれ、福娘による縁起物のプレゼント、おかみさん会による豚汁サービスや掘出し市の開催があり、境内の特設ステージでは歌謡ショウやライブなど、各種イベントが続きつぎに繰りひろげられていた。十九日夕刻には神社前の河原で、かつてのエビス講の呼び物であった花火の競演もしっかり復活されていた。

それらのうち、ここでいささか述べておきたいのは、福娘による縁起物のプレゼントと海鮮市についてである。

福娘が登場し、縁起物の吊された福笹を授与するのは、大阪の今宮戎神社や兵庫県の西宮神社の十日エビス風景である。今宮戎神社では福娘が「商売繁昌、笹持って来い」とはやしたて



写真7 恵比寿神社（四柱神社境内）の祭りで縁起笹を進呈しているところ。



写真8 市内各所に立つ「お城下町えびす講」の幟

て、大いに雰囲気を盛りあげている。その福笹授与が出雲から勧請してきた恵比寿神社の祭りに取り入れられているのは、全国のエビスの二大中心神社ともいべき西宮神社と美保神社の信仰がここで融合しているように思われ、まことに興味深い。

海鮮市には、新潟県糸魚川市の漁業関係者が魚介類を持ってきていたが、これは実行委員会が招いて市を開いてもらっていることのように、四柱神社拝殿前の好位置が市のために広く確保されていた。松本市と糸魚川方面は、大町市を経由し姫川に沿ったいわゆる塩の道を通じて歴史的にも深い関係にあるので、糸魚川の関係者が海鮮市をたてているのは当然だと考えられなくもない。しかし、平成十年の講再発足のときには、魚介類は北海道の佐呂間町から運ばれてきていた。松本市はかつて佐呂間町のカボチャ祭りに参加したことがあるので、講再発足のさいには魚を持って来て売ってもらっていたのである。しかしなにしる遠隔地なので、コストがかかりすぎて長つづきしなかった。とはいえ、魚介類の販売がないと講の祭りとしては淋しいので、距離的にも近く歴史的にも松本平とは関係の深い日本海沿岸の糸魚川に依頼したということのようなのである。

エビス講の祭りの境内に魚介類の市がないと淋しいと感じる背景には、各家のエビス講の供物には魚が欠かせないという、古くからのエビス講観があるのではないだろうか。エビス講と魚との関係は、各地のエビス像が必ずといってよいほど鯛を抱えていることから明らかなよ

うに、全国的なものである。家の神棚に供える魚として、訪れた人びとがこの海鮮市で買いためた魚を用いているかどうかは別にして、エビス講には供え物として魚を欠かせないという心意が、「まつもと城下町えびす講」に海鮮市を定着させているのではないだろうか。そうだとすれば、イベント化した今のエビス講にも、エビス講をめぐる伝承的心意が継承されていることになる。

おわりに

長野県松本市の商業地域に祀られている、深志神社の恵比寿神社、本町一丁目の恵比寿神社（二丁目エビス）、四柱神社の恵比寿神社について述べ、三社のエビス関係の祭りをみてきた。本町一丁目の恵比寿神社（二丁目エビス）も歴史的には深志神社とかかわりのある神社であるため、松本市街の秋のエビスの祭り（エビス講）は、昭和二十年前後までは深志神社氏子圏の商業関係者が深志神社関係のエビスを中心に熱心に推進し、それがやや賑いを減じはじめた昭和二十年代後半以降は、出雲地方からエビスを勧請して創祀され四柱神社境内の恵比寿神社中心展開されている。これとは別に、市神の祀りを核とした、松本の伝統的な初市である飴市にも、本町一丁目ではエビスの祭りを執り行なっている。いずれも商業地域に鎮座しているエ

ビスであるだけに、周辺農村部の人びとを吸収しながらも、もっぱら商売繁昌の神として祀られている。

そのなかにあつて、深志神社の「えびす神お里帰り祭」は、エビス講の前日に、各家からエビス・大黒像を神社に持ち寄つて合同祭祀しようというもので、全国のエビスの祭りのなかでもユニークな行事である。全国の家々のエビスには、春に働きに出て秋に稼いで戻るといふ春秋去来伝承を伴うものが少なくないが、このお里帰り祭は、このような去来伝承を、昭和四十年ごろに神社側が取り込んだ巧みな企画として注目される。それに関連して、小稿では十分に論じることができなかったが、持ち寄られるエビス・大黒には、橋の三枚目の板で福神を制作すると富貴になるという俗信を想起させる像が存在し、今後のエビスの研究に興味深い課題を提供することができた。

「松本平のエビス信仰（上・下）」をまとめ終え、不十分ながらも、松本平の農村部には農作物豊穰祈願のために、市街地商業地域には商売繁昌の神として、エビス信仰が広く深く浸透定着している実態を分析することができた。そして、商業地域のエビス講は周辺農村部の人びとを吸収して殷賑をきわめているのであるが、その背景には各商店の努力に加え、江戸時代、西宮神社が宣布したエビス信仰が定着し、農村部の人びとにエビスに何かを求めようとする心意が充満していることが挙げられるであろう。

(小稿をまとめるにあたり、遠藤久芳氏、太田 坦氏、小口博之氏、北澤道生氏、清水暎芳氏、竹内 功氏、藤村吉彦氏、藤森睦三氏、古田昭夫氏、三村 晃氏、横沢徳人氏ほか、多くの方のお世話になった。記して心より御礼申しあげます。)

注

- (1) 拙稿「松本平のエビス信仰(上)——西宮恵比寿神社の神札頒布にかかわらせて——」『日本常民文化 紀要』第二十五輯 平成十七年三月
- (2) 前稿でも断っておいたが、エビスの表記は、恵比須・恵比寿・戎・夷・蛭子・胡などさまざまあるが、小稿においては、資料の引用部分や固有名詞を除いて「エビス」で統一したい。
- (3) 高美正浩・鈴木俊幸『松本の天神さま』 高美書店 平成十四年十月
- (4) エビスと考えられていても、ほとんどはエビス・大黒がセットとして信仰されている。これは興味深い事実で、その検討のために別稿を準備しているがそれはさておき、小稿において単にエビスという場合でも、実際にはエビス・大黒であることが多いことをお断りしておく。
- (5) 『百姓伝記(日本農書全集・一六)』巻二 農山漁村文化協会 昭和五十四年八月 五十七ページ
- (6) エビスの不具神伝承については、拙稿「エビス神の側面——不具神伝承について」『日本常民文化 紀要』第十輯 参照
- (7) 野村信太郎「恵比寿講について」『信陽新聞』(昭和二十五年十一月十八日)
- (8) 『商都まつもとを担って(松本商店街連盟五十周年記念誌)』 松本商店連盟 平成十年十一月 九十一ページ 本町の商業活動の母体として「本町えびす会」があったことについては、『本町近代化

の歩み』（本町近代化推進連盟、昭和四十一年十一月）にも述べられている。

(9) 関東地方の農村部でも同じようなことが言われていたので、その背景には何かがあるのかもしれない。

(10) 『信陽新聞』昭和二十五年十一月二十一日号には、「ほくほくの足袋やさん」との見出しで、「エビス景気をさらったのは市内各通りの足袋やさんで本町通り某店では山のようにつみ上げた一足百十円の純綿紺足袋、百四十〜百五十円の同色足袋などがまたたくまに売りつくされ」と、報じている。

(11) 館市の全体像については、松本あめ市実行委員会編『松本のあめ市―その歴史と起源』（高美書店、平成九年十二月）に詳しい。

(12) 前掲註(8)『商都まつもとを担って』二十八ページ

(小稿は、成城大学特別研究助成による平成十七・十八年度の研究プロジェクト「地域文化の継承と再創造に関する研究」の成果の一部である。)